

解答

一

問一 いつもは、障がい者であることで人に気をつかわせるが、今回はぼくが車いすに乗っていなかったため健康者と思われ、要らぬ気づかいを受けず、自然に接してくれた。

問二 ひとりで散歩に出かけ、車いすがなければ出会った人に健常者だと思われるという体験をして喜んでいたが、ひとりで帰ることはできず、人の助けがなければ何もひとりでできないと思い知り、落ちこんでいるということ。

問三 カウンセラーは、ぼくの気持ちを理解しているようなことを言うが、いちばん悩んでいることはわかってくれず、結局はひとことなのだといらだちを感じている。

問四 ぼくが大きな冒険にいとみ、自分を乗り越えようとしていたのに、友だちはのん気にふざけたりして楽しそうにしていたと聞き、彼らのようにできるだけ楽しくしているのが正解なのかもしれないと思ったから。

問五 ぼくを助けが必要な存在と見る母さんとちがい、父さんはぼくが自分でできることには手を貸さず、自立したいという気持ちを静かに見守ってくれ、息子の一人として誇りに思い、これからの成長を楽しみにしてくれる存在。

二

問一 一枚の「絵」を通じて感じるものは、鑑賞者も画家もその時々心理状態や身体コンディションによって変化するものなので、何度も何度も一点の絵と向きあうことが大切であるから。

問二 何度も好きな絵、美しいと感じた絵と向きあうことは、想像力・創造力・空想力・喚起力といった生活を豊かにするために必要な能力を発達させ、人間や物のもつ真の価値を見極める美の物差しを鍛えることになるから。

三

- (1) 高層 (2) 拝観 (3) 護衛 (4) 適切 (5) 玉石混交

解説

一

問五 母さんは「ぼく」を「あかちゃんあつかい」し、「ぼく」の存在のために疲れているが、父さんは「自分自身に勝つてことは、どんな勝利より価値があるんだ」と「ぼく」の成長を認めてくれ、「ぼく」は、「父さんの言うとおりだ。前ならとてもできないと思っていたようなことが、ここ二か月でたくさんできるようになった。これからだって、もっといろんなことができるようになるかもしれない。」と気持ちが明るくなっています。また、散歩の支度をする「ぼく」に父さんは手を貸さず、「じっと待ってくれた。うれしかった」とあります。自立を見守ってくれる父さんの態度によって「ぼく」は自信がもてるようになっていく様子が描かれています。

二

問二 続く部分で「何度も好きなものと出会う、自分が美しいと感じたものと出会うというトレーニング」は、『想像力』『創造力』『空想力』『喚起力』といった感性、人間の生活を豊かにするための、もっとも必要な能力を発達させるトレーニングでもあります。」とあり、それは「人間や物のもつ真の価値を見極める、あなた自身の美の物差しを鍛えるトレーニングである」と述べられています。